

乳幼児をかかえる保護者の子育ての現状

◆不安・悩み、出産意欲に関する調査◆

報告書

平成18年3月

はじめに

社団法人全国私立保育園連盟

子育て・保育総合研究機構

代表 遠山洋一

少子化の傾向は未だとどまるところを知らず、その対策は、深刻な政治課題となっています。

少子化の要因としては、いくつか上げられていますが、子育て世代の「子育て不安」が一つの大きな要因として考えられてきました。

いうまでもなく、「子育て不安」は、単に少子化の要因として問題だけでなく、子どもたちの健やかな育ちにとっても大きな問題で、それが著しく、かつ放置された場合には児童虐待にもつながる危険性をはらんでいます。

親が子育てに様々な悩みや不安を感じるのは、ある意味ではごく自然なことです。その悩みや不安に応じてくれる人や場がないとき、親は不適切な子育て行動に向かったり、次の子への出産意欲を持てなくなるのでしょう。

そういうことから、母親学級、保健師等による訪問援助、子育て広場・つどいの広場の設置、各種の育児相談など様々な対策がとられてきました。

その中で、保育所・幼稚園等は、日常的継続的に子どもと接し親と接する場であり、そこが親の相談に応じ、悩みに応え、不安を和らげる力をもつことは、大きな効果をもつ対策の一つであろうと考えられ、期待もされてきています。今回の調査結果は、明らかにこれを裏付ける結果となっています。

では、保育所・幼稚園等がこうした力をもつためには、どのような条件が求められるのか、どのような保育者の在り方や経営の在り方であれば、そのような力をもつことができるのかを探ることが、今回の調査研究の大きな目的であると言えるでしょう。今回の調査結果から、そうした点についてできうるかぎり多くの示唆するものを読みとって行きたいと思います。

今回の調査研究は、独立行政法人福祉医療機構の平成17年度子育て支援基金助成を受けて行われたもので、第一生命経済研究所副主任研究員である松田茂樹氏をリーダーとする研究チームによって実施されました。研究チームのメンバーの皆さんをはじめ、調査に協力して下さった保育所・幼稚園・子育て広場の施設長、保育者・スタッフ、保護者の皆さんに心より感謝申し上げます。

今回の調査研究が国や自治体の政策に活かされることを願うとともに、子ども・子育てに関わる様々な現場が、この調査報告から多くのものを読みとり活かして行って下さることを切に願っております。

**子育て不安や出産意欲の把握と保育園の相談機能の充実に関する
調査委員会**

委員長	松田 茂樹	第一生命経済研究所副主任研究員
委員	井上 清美	大妻女子大学講師
	坂本 有芳	お茶の水女子大学21世紀COEプログラムリサーチアシスタント
	汐見 和恵	東京文化短期大学助教授
	品田 知美	立教大学講師
	下開 千春	第一生命経済研究所副主任研究員
	長町理恵子	日本経済研究センター研究員
	遠山 洋一	全国私立保育園連盟保育・子育て研究機構代表（バオバブ保育園ちいさな家園長）
研究協力者	裴 智恵	慶応義塾大学大学院社会学研究科博士課程
	永田 沙恵	東京工業大学大学院社会理工学研究科修士課程

● 目 次 ●

はじめに	1
要旨	7
第1章 調査の目的と概要	13
1. 調査の目的	13
2. 調査の方法	13
3. 回答者の属性	14
《 第1部 子育ての様子 》	
第2章 家庭における子育ての分担とサポート関係	19
1. 子育ての様子	19
2. 子育てのサポート関係	24
3. まとめ	31
第3章 子育てをめぐる保護者の意識と負担感	33
1. 保護者の子育て観・家族規範意識	33
2. 育児不安と子育て観・家族規範	41
3. 負担感と生活満足度	43
4. 園のサポートと負担感・生活満足度	46
5. まとめ	47
第4章 保育園・幼稚園の利用状況	50
1. 利用する保育サービス	50
2. 子どもの生活時間	52
3. まとめと考察	56
《 第2部 子育ての不安と保育園・幼稚園のサポート 》	
第5章 保護者の子育て不安	59
1. 保護者の育児不安	59
2. 保護者が抱える子育ての悩み	67
3. 体罰傾向	76
4. まとめと考察	78
第6章 保育園・幼稚園による保護者の子育ての不安や悩みの把握と対応	81
1. 担任の保育者と話をする機会	81
2. 保育園・幼稚園による保護者への対応	82
3. 保育園・幼稚園による保護者の子育ての悩みの把握状況	86
4. まとめ	108
第7章 保育園・幼稚園のサポート、育児不安・悩み、追加出産意欲の関係	111
1. 保育園・幼稚園のサポートと保護者の育児不安・悩み	111

2. 育児不安・悩みと今後の出産意欲の関係	116
3. まとめ	121
《 第3部 保育園・幼稚園の経営と労働環境 》	
第8章 保育園・幼稚園の運営状況	125
1. 受け入れ園児数と保育者の人員配置	125
2. クラス数と編成と持ち上がりの状況	128
3. 早朝保育、通常保育、延長保育と研修の実施状況	131
4. まとめ	133
第9章 保育者の労働環境とストレス	134
1. 保育者の労働環境	134
2. 保育者の仕事に関する満足度	139
3. 満足度とストレスなどの関係	148
4. 保育者の職務ストレス	152
5. まとめ	163
第10章 保育園・幼稚園の運営状況・労働環境と保護者へのサポート	165
1. 保護者が求めている保育環境・保育内容・保育サービス	165
2. 園が提供している事業・サービスと運営における意識	170
3. 保護者の園への満足度と園の運営状況・労働環境との関連	173
4. まとめ	178
第11章 事例紹介：保護者の評価が高い保育園・幼稚園	181
1. 保育園	181
2. 幼稚園	183
第12章 一時保育・子育て広場利用者の子育ての様子	190
1. 一時保育	190
2. 子育て広場	210
第13章 結論	227
1. 保育園・幼稚園を利用する保護者の子育ての現状	227
2. 子育ての不安・悩みと保育園・幼稚園のサポート	228
3. 保育園・幼稚園の経営と労働環境	230
4. 一時保育と子育て広場の利用者の特徴	231
5. 保育園・幼稚園における保護者に対する支援の充実	231
付属資料・グループインタビューの結果	232
1. 調査の目的	232
2. 調査方法	232
3. 調査結果	232
調査票	257

要 旨

1. 調査の目的と方法

本調査の目的は、乳幼児を抱えた保護者の子育ての不安や悩み、出産意欲、保育環境の現状を把握することである。具体的な調査課題は次の3点である。第一の課題は、乳幼児を抱えた保護者の日常的な子育ての様子を把握することである。具体的には、父母の子育てのかかわり、子育てのサポート・ネットワーク、保育園・幼稚園の利用状況を把握する。第二の課題は、保護者の子育ての不安や悩みの現状と、それが保護者の追加出産意欲に与える影響を明らかにすることである。また、保育園・幼稚園からのサポートが、保護者の子育て不安を軽減し、ひいては追加出産意欲を高める効果の有無を解明する。第三の課題は、保育園・幼稚園から保護者に対する効果的なサポートの方法を調査から見出すことである。

本調査では、保育園・幼稚園の父母に対するグループインタビュー、保育園・幼稚園と子育て広場に対するアンケート調査、保育園・幼稚園の園長に対する聞き取り調査を実施した。

保育園・幼稚園を対象にしたアンケート調査は、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県にある私立保育園、公立保育園、私立幼稚園の計38園において、保護者、保育者、園長に対して、平成17年7～8月に実施した。調査票は園長票、保育者票、保護者票の3種類であり、これを対象園に郵送した。各園において該当者に調査票を配布し、回答後に厳封された調査票を回収した。調査の回答は、このうち32園から得た。調査票の配布数と有効回収数は、それぞれ園長調査が38人、32人（有効回収率84.2%）、保育者調査が同808人、496人（同61.4%）である。保護者票は、配布数が6,104人、有効回収数は3,345世帯（同54.8%）である。保護者調査では、父母がいる場合は父母両方を、ひとり親の場合は該当者のみを、保護者が父母以外の場合は父母に準じる者を対象に実施した。回収数は、母親票が3,303票、父親票が2,648票、その他が43票である。子育て広場調査は、東京都内の6箇所の子育て広場を対象に、平成17年8月に実施した。各広場において、50セット（父親票、母親票）の調査票を来訪者に配布し、回答された調査票を郵送で回収した。調査票の配布数は300組、有効回収数は、母親票が56人（有効回収率18.6%）、父親票が20人（同6.7%）である。

2. 保育園・幼稚園を利用する保護者の子育ての現状

保育園・幼稚園を利用する保護者の子育ての現状を分析した結果、次の知見が得られた。第一に、保育園・幼稚園とも、普段の子育ての大半を母親が担っていることが確認された。子育ての大半を母親が行う状況は、子育てに関する心理的、身体的負荷が母親に多くかかっていることを示す。家事と育児についての母親の負担感が高い。特に、保育園児の母親は仕事、家事・育児ともに時間が不足し、負担感が高いことが見出された。また、父親の子育て参加が少ない背景には、父親たちの長時間労働の問題もあることが示唆された。

第二に、子育てをサポートするインフォーマルなネットワークについてみると、母親の多くは、外出時に子どもを預けられるネットワークを複数持っていた。ただし、保育園児の母親のネットワークは幼稚園児よりも小さい。平日に多忙な仕事を行う母親たちは、休日に子どもを預けあえ

る関係をもっていない。また、子どもが病気になった時、幼稚園児を持つ母親のほぼ全てが自分で看病すると答えていることから、母親にとって、配偶者を含めてそれらのリスクを吸収できるインフォーマルなネットワークは十分でないことも見出された。

第三に、子どもの生活時間をみると、幼稚園児は登降園が特定の時間帯に集中しているが、保育園児は登園時間帯や降園時間帯の差が大きい。幼稚園児の母親よりも保育園児の母親の方が同じ園の保護者と話をする機会が少なく、インフォーマルなネットワークが小さいが、この背景のひとつに登降園の時間の違いがある。子育ての悩みなどを保護者同士で相談しあい、解決する機会は、保育園の保護者の方が少ないことが見出された。

3. 子育ての不安・悩みの現状

保護者の子育ての不安や悩みを分析した結果からは、次の知見が得られた。

第一に、保護者のうち、子育ての悩みを感じている者の割合は高くはない。具体的な悩みを感じている割合をみると、悩みを感じている者が最も多い「子どもの叱り方のこと」では、「とても悩んでいる」者が5.9%、「悩んでいる」者が28.2%である。以下主なものをあげると「子どもがいうことをきかないこと」(同2.8%、19.9%)、「しつけができないこと」(同1.2%、13.5%)などとなっている。「とても悩んでいる」と回答した者は極少数であることは注目される。ただし、「子どものことがわずらわしくてイライラする」「子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある」と答えた者は約半数いる。したがって、保護者の悩みや不安は、個々具体的な問題についての悩みというよりも、漠然とした不安感であることがうかがわれる。父母を比較すると、不安や悩みを感じている割合は、父親よりも母親の方が高い。

第二に、母親の属性と育児不安や子育ての悩みの関係を分析した結果、長子が2～6歳であること、親が育児中心の生活で子と接している時間が長いこと、配偶者のサポートが得られず母親が1人で育児を抱えることなどが、育児不安の高さにつながるが見出された。子育ての悩みは、子育て経験の有無や同年齢の子の様子を知る機会の豊富さなど、子どもの発達過程を保護者が感覚的につかんでいるかどうかによって左右されることが示された。また育児不安と子育ての悩みのいずれについても、配偶者の育児や子どもとの関わりに対する満足度に大きく影響を受けることが確認された。また、母親の就労形態についてみると、フルタイムの母親はそれ以外の就労形態の母親よりも育児不安が若干低い、子育ての悩みについては就労形態による差はみられなかった。

4. 保育園・幼稚園から保護者に対するサポートの必要性

保育園・幼稚園からのサポート、保護者の育児不安と子育ての悩み、追加出産意欲の関係を分析した結果、次の知見が得られた。

第一に、保育園・幼稚園から保護者に対するサポートが多いほど、母親の育児不安や子育ての悩みは減少する。保育園・幼稚園から保護者に対してなされるサポートを充実することは、母親の育児不安や子育ての悩みを軽減することにつながる。このとき、フルタイムの母親はそれ以外の就労形態の母親よりも育児不安が若干低いものの、子育ての悩みは就労形態による差がみられないことをふまえると、保護者に対するサポートは、特定の就労形態の者のみならず、どのような就労形態の者に対しても広く求められるものであるといえる。

このとき、保護者全体に占める子育ての悩みを感じている者の割合は多くはないことをふまえると、保育園・幼稚園から保護者に対するサポートは広く浅くではなく、狭く深く、すなわち子育ての悩みの程度が軽い者までを含む多くの保護者に対して行うのではなく、悩みの程度が重い者に対して手厚いサポートを行うことが求められているといえる。

そのためには、保育者が普段から保護者とコミュニケーションを十分にとり、保護者とその子どもの状況をよく理解して、サポートが必要な保護者を把握することが課題になる。保育者の意識をみると、現状では保育者と保護者とのコミュニケーションが十分であるとは評価されていない。したがって、保育園・幼稚園から保護者へのサポートを効果的にするためには、まずは保育者と保護者のコミュニケーションを密接にすることが求められる。

育児は主に母親が担っている場合が多く、育児不安や子育ての悩みも母親のほうが大きい。よってサポートの対象としては、まず母親が重要であることが考えられる。しかし母親の育児不安や子育ての悩みには、配偶者の関わり方が非常に重要な役割を占めている。このことをふまえると、母親を直接支援することのみならず、父親が子育てに関わることを促すような取り組みも重要である。

第二に、育児不安が高いことは追加出産意欲を低下させる強い影響があることが見出された。育児不安が少子化のひとつの要因であることは指摘されてきたが、この関係が客観的なデータによって統計的に裏付けられたことの意味は大きい。育児不安の程度が高い者から低い者まで4グループに分けた場合、子ども数が1人の母親のうち最も育児不安の程度が低いグループに属する者は0.76人追加で出産する意向があるのに対して、最も育児不安の程度が高いグループに属する者はその値が0.52人で、0.24人分少ない。子ども数が2人の母親では、最も育児不安の程度が低いグループに属する者は0.35人追加で出産する意向があるのに対して、最も育児不安の程度が高いグループに属する者はその値が0.24人で、0.11人分少ない。近年母親の育児不安が問題視されているが、それを軽減することは、少子化対策に寄与することが推察される。

母親の育児不安の軽減策としては多様な方法が考えられるが、保育園・幼稚園児をもつ者については、保育園・幼稚園という既存の子育て施設において保護者に対するサポートを充実させることによって効果的な対応が可能であることが示唆される。保育園・幼稚園からのサポートを充実させることは、母親の育児不安を軽減し、ひいては育児不安からもたらされる母親の追加出産意欲の減退を防ぐことに寄与する。

5. 保育者の就労状況と保護者の評価の関係

保育者の就労状況と保護者の評価の関係を分析した結果からは、次の知見が得られた。

第一に、保護者の満足度が高い園は非常勤保育者の割合が低く、満足度が低い園はその割合が高い。第二に、保護者の満足度が高い園は常勤保育者の転出入が少なく、満足度が低い園では転出入が多い。以上の結果から、常勤の保育者の割合が高く、かつ常勤の保育者の転出入が少ない園の方が、保護者の評価が高くなる傾向があるといえる。非常勤の保育者よりも常勤の保育者の方が、長期にわたって雇用されているために経験年数が長く、かつOJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）や研修の機会も豊富であるため、保育者としての能力が蓄積されているとみられる。また、転出入が少ないことは、保育者が継続して同じ保護者と子どもをケアすることを可能にす

る。こうした理由から、常勤の保育者の割合が高く、転出入が低いことが、保護者の評価を高めていることが示唆された。

第二に、保育者の就労環境についてみると、保育園と幼稚園の性格の違いを反映して、1施設あたりの児童数は幼稚園の方が保育園よりも多く、保育者数については、常勤・非常勤ともに、保育園より幼稚園の方が少ない。この結果、保育園よりも幼稚園の方が、一人の保育者が担当する子ども数が多く、保育者の負担が重い傾向がある。保育現場で経験する職務ストレスを分析すると、私立保育園は業務過重のストレスが比較的高く、公立保育園は裁量と資源の不足のストレスが高いことが見出された。幼稚園は、業務過重のストレスが最も高い。職務ストレスが高くなるほど、バーン・アウト（燃え尽き）も大きくなるため、保育者の職務ストレスを軽減する対策の必要性が示唆された。

6. 一時保育と子育て広場の利用者の特徴

一時保育と子育て広場の利用者の特徴については、次の知見が得られた。

一時保育を利用する母親についてみると、約6割が就労者、約4割が専業主婦である。就労者の内訳をみると、フルタイムよりも、パートが多い。利用頻度は週3日以上が6割であり、一時保育とはいえ、実際には恒常的な保育として利用している者が少なくないことが見出された。利用者の一時保育に対する評価をみると、通常保育利用者よりも、保育者の家庭に対する理解が少なくと感じている者が多い。したがって、保育園には、通常保育の利用者と同様に、一時保育利用者に対するサポートも充実させることが求められている。

一方、子育て広場を利用する母親の多くは専業主婦である。父親の利用はごく少数である。子どもは2歳以下の低年齢の乳幼児が多い。保護者が現在利用しているまたは今後利用したいサービスとしては、都心の住宅事情や安心して子どもを外で遊ばせる場所の確保が難しいことを反映して、「天候に関係なく子どもを遊ばせることができる屋内の広い場所」「子どもを安全にのびのびと遊ばせることができる庭」を求める声が多い。また、広場の利用者は気軽に短時間利用できるサービスを広場に求めていることが見出された。

7. 保育園・幼稚園における保護者に対する支援の充実

現在、乳幼児を抱えた保護者の子育ての不安や悩みが、社会的な問題になっている。本調査結果をふまえると、保育園・幼稚園を利用する保護者については、保育園・幼稚園におけるサポートを充実させることが、彼らの子育ての不安や悩みを軽減することに寄与するといえる。

現状では、保護者の不安や悩みに必ずしも園が応えるような支援やサービスの提供が十分なされていないとはいえない。本調査結果をふまえると、保護者の悩みや不安に応える具体的なサービスや支援を考えていくことが必要であるといえる。

保育園・幼稚園において相談や情報提供等のサポートを効果的に行うためには、「広く浅くではなく、狭く深く」で、全ての保護者に対して相談や情報提供を行うのではなく、悩みの程度が重い者に対して手厚いサポートを行うことが求められる。そのためには、回り道のようなが、サポートの前段階として、日常の保育において保育者と保護者の間のコミュニケーションを密接にとり、保育者が保護者と子どもの状況を十分把握することが重要である。

少子化対策の観点からみると、以上のように保育園・幼稚園からのサポートを充実させることは、母親の育児不安を軽減して、育児不安からもたらされる追加出産意欲の減退を防ぐため、ひいてはわが国の出生率の向上に寄与すると考えられる。保育園・幼稚園において保護者に対するサポートを充実させることは、1保育園、1幼稚園の範囲を超えた少子化対策としての意義も併せ持つといえる。

第1章 調査の目的と概要

1. 調査の目的

本調査の目的は、乳幼児を抱えた保護者の子育ての悩み、子育て不安、出産意欲の現状を調査によって把握することである。具体的な調査課題は次の3点である。第一の課題は、乳幼児を抱えた保護者の日常的な子育ての様子を把握することである。具体的には、父母の子育てのかかわり、子育てのサポート・ネットワーク、保育園・幼稚園の利用状況を把握する。第二の課題は、保護者の子育ての不安や悩みの現状と、それが保護者の追加出産意欲に与える影響を明らかにすることである。また、保育園・幼稚園からのサポートが、保護者の子育て不安を軽減し、育児不安からもたらされる追加出産意欲の減退を防ぐ効果の有無を解明する。第三の課題は、保育園・幼稚園から保護者に対する効果的なサポートの方法を調査から見出すことである。

2. 調査の方法

本調査では、保育園・幼稚園調査と子育て広場調査を実施した。また、アンケート調査に先立ち、定性的に父母から具体的な子育ての悩み、不安、問題点等を抽出し、アンケート設計に活用するため、乳幼児を持つ保護者に対するグループ・インタビュー調査を実施した。保護者の評価が高かった保育園・幼稚園の園長へのインタビュー調査も実施した。保護者の評価の高かった保育園・幼稚園の園長へのインタビュー調査も実施した。以下に、それぞれの調査の方法を記す。

(1) 保育園・幼稚園調査

本調査は、関東1都3県（埼玉・千葉・神奈川県）にある私立保育園（10園）と公立保育園（9園）、幼稚園（19園）、計38保育園を対象に、平成17年7月から8月に実施した。

調査対象園の抽出は、次の要領で行った。まず、関東1都3県の広域にある保育園から、4～6歳人口の比率をもとに、40園を抽出する都県を割り当てた。その結果、東京都は13園（うち保育園数6、幼稚園数7、以下同）、神奈川県11園（5、6）、埼玉県9園（5、4）、千葉県7園（4、3）となった。次に、各都県で、本調査の協力が得られる園を求め、最終的に38園から調査協力を得た。

調査票は、①園長が保育園の属性、保育状況等を回答する園長票、②保育者が保育状況や自らの就労状況等を回答する保育者票、③子どもの保護者（父母）が、家庭での子育ての状況を回答する保護者票の3種類である。この3種類の調査票を調査対象園に郵送し、回答した調査票を再び郵送で回収した。各調査票の回収数と回収率は次の通りである。保育園・幼稚園単位では、調査対象園38園のうち、32園から回答を得た。

調査票の配布数と有効回答数は、園長票が38人、32人（有効回収率84.2%）、保育者票が同808人、496人（同61.4%）である。保護者票は、配布数が6,104人、有効回収数は3,345世帯（同54.8%）である。保護者調査では、父母がいる場合は父母両方を、ひとり親の場合は該当者のみを、保護者が父母以外の場合は父母に準じる者を対象に実施した。回収数は、母親票が3,303票、父親票が2,648票、その他が29票、無回答が43票である。

(2) 子育て広場調査

子育て広場の調査は、調査協力が得られた東京都内の6つの子育て広場の利用者を調査対象に、平成17年8月に実施した。子どもの保護者（父母）が家庭での子育ての状況を回答する保護者票を子育て広場に郵送し、各広場にて50セット（父親票＋母親票）、計300セットのアンケートを来訪者に配布した。調査票の回収方法は、回答者による直接郵送法である。回収数は、母親票が56人（有効回収率18.6%）、父親票が20人（同6.7%）となった。

(3) 乳幼児を抱えた保護者に対するグループ・インタビュー調査

乳幼児を抱えた父母に対するグループ・インタビューを実施して、定性的に父母から具体的な子育ての悩み、不安、問題点等を抽出した。この調査は、そこで得られた結果をアンケート設計に活用することを目的としたものである。

調査時期は平成17年6月、調査対象は乳幼児を抱えた保育園と幼稚園の父親と母親の4グループ、合計19人である。調査方法は、保育園と幼稚園で、それぞれ父親と母親を別グループとした4、5名によるグループ・インタビューである。調査項目は、子育ての実態、子育ての悩み・不安、追加出産意向などである。グループ・インタビューの回答者の属性については、個人が特定されない情報に限り、一部を資料にそれぞれ記述した。

(4) 保護者の評価が高い保育園・幼稚園の園長インタビュー調査

保育園・幼稚園調査において、保護者の評価が高かった保育園2園、幼稚園2園の園長に対してインタビューを行い、日常の保育や保護者に対するサポートの実施状況を調べた。

3. 回答者の属性

アンケート調査の回答者の主な属性は図表1-1である。園長票の保育園の設置形態をみると、43.8%が幼稚園、31.3%が私立保育園（公設民営を含む）、25.0%が公立保育園である。保育園（私立・公立）の合計は56.3%となる。保育者票の就労形態についてみると、回答を得た496人のうち、常勤が72.0%と大半を占め、次いで非常勤（14.9%）、有期契約の常勤（10.9%）となっている。保護者票の回答者は、母親が54.8%で最も多く、以下、父親（44.0%）などとなっている。

図表1-1 回答者の内訳

園長票：私立保育園・公立保育園・幼稚園

	全 体	私立保育園	公立保育園	幼稚園
回答者数	32	10	8	14
%	100.0	31.3	25.0	43.8

保育者票：就労形態

	全 体	常 勤	有期契約 の常勤	非常勤	派遣社員	無回答
回答者数	496	357	54	74	1	10
%	100.0	72.0	10.9	14.9	0.2	2.0

保護者票：回答者の属性

	全 体	母 親	父 親	その他	無回答
回答者数	6,023	3,303	2,648	29	43
%	100.0	54.8	44.0	0.5	0.7

第2章 家庭における子育ての分担とサポート関係

乳幼児期を育てる時期、親たちは家事や育児に多くの労力を費やしている。家族生活において時間の圧力が最も高まるライフステージをのりきるために、母親と父親はどのように家事や育児を分担しているだろうか。また、周囲の人々は、彼らをどのようにサポートしているのだろうか。

本章では、日常の子どもへのかかわりの様子や家事・育児時間から子育ての様子を把握し、身近な子育ての支援者にはどんな人がいるのか、頼りにされているのは誰かなど、サポートの実態について分析する。

1. 子育ての様子

(1) 子育ての状況

①父親と母親による子育ての分担

最近1ヵ月の間実際にしたと思う子育ての状況について、父親と母親別の割合を集計し、図表2-1にまとめた。全体的にいえば、子育ての大半は母親が担っていることがわかる。90%以上の母親が週4日以上行っている子育て行為とは、園への送り迎えをすること、いっしょに夕食をとること、食事の用意をすること、洗濯をすることである。一方、父親の90%以上が週4日以上やっていることはなく、最も多かった「子どもと夕食をとる」行為でさえ、26.0%にすぎない。また、60%以上の母親が週4日以上やっていることとしては、子どもの排泄関連の補助や、お風呂に入る、添い寝などの身体的な接触を伴う行為であった。夜中に起きて世話をする母親もほぼ60%となっている。また、お風呂は父親が比較的にかかりやすい行為であり、週2～3日以上は行う人が60%以上である。

つぎに、子育ての状況を、項目別に週当たり頻度^{*1}におきかえ、どんな行為で父親と母親の差が大きいのかを平均値で比較してみよう（図表2-2）。父親と母親の頻度差が週当たり4日以上あるのは、保育園・幼稚園の送り迎えと食事や洗濯である。つまり、基礎的な家事・育児部分はすべて母親がやっているということがわかる。母親が週当たり2日程度父親よりも多くやっている子育て行為には、夕食をともにしたり、友達と遊ぶ様子をみたりすること、添い寝や夜中の世話、絵本の読み聞かせやお風呂などがある。これらの子育ては、時間帯で見れば夕食よりも遅く、子どもの就寝時間帯にあたる行為なので、父親が在宅している場合も少なくないと思われる。にもかかわらず母親が子どもとのかかわりを続けている様子がうかがえる。子どもの食事を手伝ったり、数や文字などを教える、いっしょに買い物にいくなどの行為は、それほど母親が頻繁にやっていないので父親との差が少なくなっている。

②通園先・末子年齢と子育ての状況

さらに、子育ての行為の週当たり頻度が、通園先と末子年齢によってどのような差があるのかについて図表2-3、2-4から比較してみよう。最も差が目立つのは、食事を手伝ったり、おむつかえ/トイレの手伝いの頻度が保育園（末子0～2歳）の層で、大きくなっていることである。同じ項目が父親でも、母親でも高くなっていることから、子育てのしかたが違っていると推測される。また、夜中の子どもの世話や、寝付くまでの添い寝などの項目も、保育園児の母親の方が全

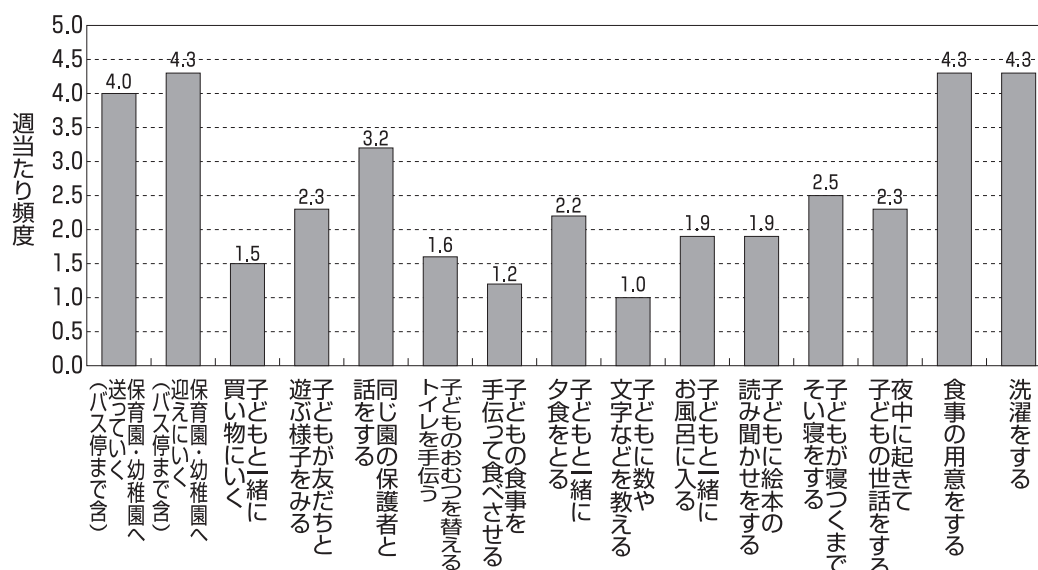
般にやっている傾向がある。

子どもと接する時間が少ない保育園児の親の方が、むしろ子どもに手をかけているようにみえ

図表2-1 子育ての状況(最近1ヵ月:%)

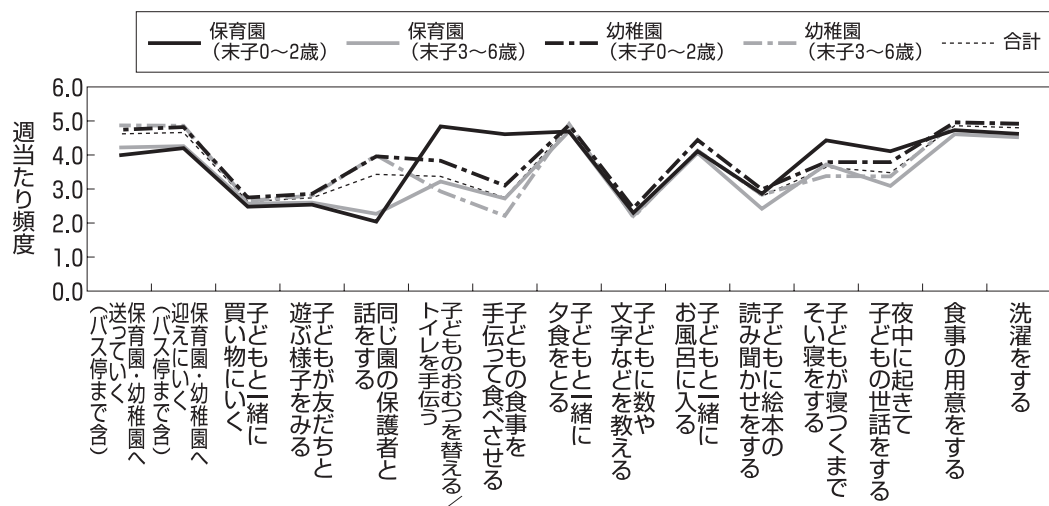
		週4日 以上	週2,3日	週1日	月1,2日	ほとんど なし	無回答	n
保育園・幼稚園へ送っていく (バス停まで含)	母 父	90.2 7.3	3.0 4.1	1.2 4.5	1.9 20.4	3.3 63.5	0.3 0.3	2,978 2,401
保育園・幼稚園へ迎えに行く (バス停まで含)	母 父	90.5 2.2	3.9 3.3	1.4 5.3	1.7 19.9	2.1 68.7	0.3 0.5	2,978 2,401
子どもと一緒に買い物に行く	母 父	22.6 1.7	50.5 19.2	21.7 50.1	3.8 21.7	1.1 6.9	0.3 0.5	2,978 2,401
子どもが友だちと遊ぶ様子をみる	母 父	33.6 1.7	34.1 6.1	15.8 15.5	8.3 26.7	7.4 49.7	0.8 0.3	2,978 2,401
同じ園の保護者と話をする	母 父	54.8 0.6	21.8 2.2	9.9 3.8	6.9 16.1	6.2 76.3	0.5 0.9	2,978 2,401
子どものおむつを替える/ トイレを手伝う	母 父	61.8 20.2	8.4 23.7	3.1 15.3	2.7 9.5	23.5 30.4	0.5 0.9	2,978 2,401
子どもの食事を手伝って食べさせる	母 父	48.3 14.6	9.7 25.4	5.3 18.0	4.2 10.7	31.8 30.4	0.7 1.1	2,978 2,401
子どもと一緒に夕食をとる	母 父	94.6 26.0	3.8 46.1	0.7 20.2	0.3 3.8	0.6 3.8	0.1 0.2	2,978 2,401
子どもに数や文字などを教える	母 父	25.1 6.6	29.7 20.7	17.9 26.6	10.2 21.9	16.4 23.9	0.9 0.3	2,978 2,401
子どもと一緒にお風呂に入る	母 父	74.5 19.1	14.3 40.6	5.2 24.7	3.3 9.5	2.5 5.7	0.2 0.2	2,978 2,401
子どもに絵本の読み聞かせをする	母 父	37.2 3.7	28.8 15.2	15.5 20.7	10.1 24.6	8.1 35.6	0.3 0.2	2,978 2,401
子どもが寝つくまでそい寝をする	母 父	65.3 9.2	12.4 19.4	3.8 18.0	3.2 15.4	15.1 37.7	0.3 0.2	2,978 2,401
夜中に起きて子どもの世話をする	母 父	59.9 11.5	16.0 17.0	5.1 11.6	4.1 15.6	14.4 43.8	0.5 0.5	2,978 2,401
食事の用意をする	母 父	95.9 3.9	2.3 9.3	0.8 11.2	0.2 15.8	0.7 59.7	0.0 0.1	2,978 2,401
洗濯をする	母 父	93.9 4.7	3.7 6.0	0.9 6.6	0.3 8.2	1.1 74.3	0.1 0.2	2,978 2,401

図表2-2 母親と父親 による週当たり頻度の差(父親-母親:日)



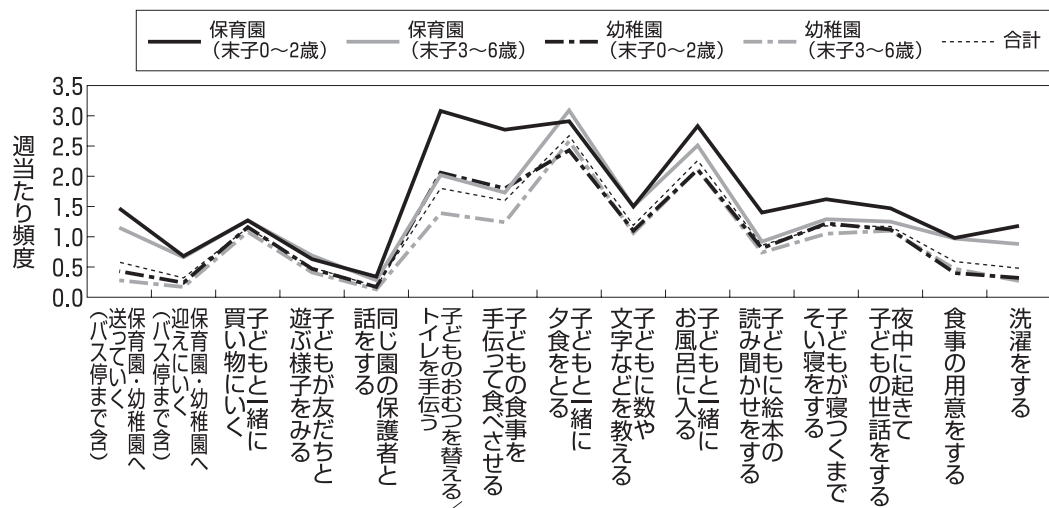
るのはなぜであろうか。1つには、幼稚園児（末子0～2歳）の層は、配布先が幼稚園のために、一人目の子どもではない、ということから親が手馴れていてあまり手をかけずにすんでいるという可能性がある。けれども、末子3～6歳児だけで比べても、同様の傾向があるためそれだけではなさそうだ。忙しい生活のなかでは、かえって子どもの食事やトイレを待つゆとりがなく、つい手伝ってしまうということもあるのではないか。添い寝したり、夜中に世話をしたりすることで昼間いっしょに過ごせない分を、親子ともに埋め合わせているという面があるのかもしれない。父親の子育てへのかかわりが多いことも考慮すると、保育園児は意外に手をかけて育てられているといえる。また、幼稚園児を持つ親は母親に送り迎えが集中し、明らかに園の保護者と話をする頻度が高くなっている。保育園の母親より時間にゆとりがあるなかで子育てをしている様子がうかがえる。

図表2-3 子育ての状況（母親：通園先と末子年齢別）



③

図表2-4 子育ての状況（父親：通園先と末子年齢別）



親の属性と子育ての状況

では、親の属性によって子育てのしかたはかわるのだろうか。通園先と末子年齢別に、母親の学歴によって子育て行為に違いがあるかどうかを順位相関係数で検証したところ、最大0.36（幼稚園末子0～2歳）の相関が得られた。最もはっきりしていた項目は、絵本の読み聞かせで、高学歴の親は読み聞かせる頻度が高い。その他の項目をみても、全体に高学歴の親は子どもに手をかけている傾向がみられる。また、幼稚園の末子0～2歳の子を持つ層に限ると、母親は、高学歴であるほど園の保護者と話をする。どの層でも、食事を手伝ったり、添い寝や夜中の世話、オムツやトイレなど身体的ケアは学歴が高いと頻度が増える傾向にあった。保育園児の送りと、買い物、数や文字を教えるという行為をのぞくと、多くの項目で子どもに手をかけているのであるから、日常で子育てへの負担がかかっているのは高学歴の親であるといえるだろう。近年は、子どもに手をかけることが望ましいと専門家が推奨しているため、学歴がある親の方が熱心に行っているのかもしれない。もっとも、末子3～6歳でトイレや食事の手伝いにおける頻度が多いことは、子どもの自立の遅れを表すともいえ、かかわりの頻度は多ければよいともいえない面がある。

父親については、母親より学歴との関連がみられた項目は少なかったものの、やはり絵本の読み聞かせは通園先や末子年齢を問わず正の相関がある。保育園児の父親は、学歴が高いほど園の保護者と話す傾向がある。

また、年齢と子育ての様子との相関係数を通園先と末子年齢別にみたところ、学歴に比べて関連は微弱であった。全般に、「最近の若い親は…」といわれるほどの違いは、ここでのデータを見る限りみあたらない。母親の年齢と最も相関の高かった項目は、保育園児（末子0～2歳）を持つ人の食事の用意で、0.15だった。そのほか、絶対値で0.1以上の正相関が得られた項目は、保育園児の親の洗濯、保育園の保護者と話す（末子0～2歳）、幼稚園（末子0～2歳）にお迎えに行くという項目のみである。また、年齢が上がると頻度が減るという負相関が、絶対値で0.1以上だった項目は、保育園への送り（0～2歳）、数や文字などを教える（幼稚園末子0～2歳）である。食事の用意よりは早期教育という若い世代の傾向が反映しているかもしれない。

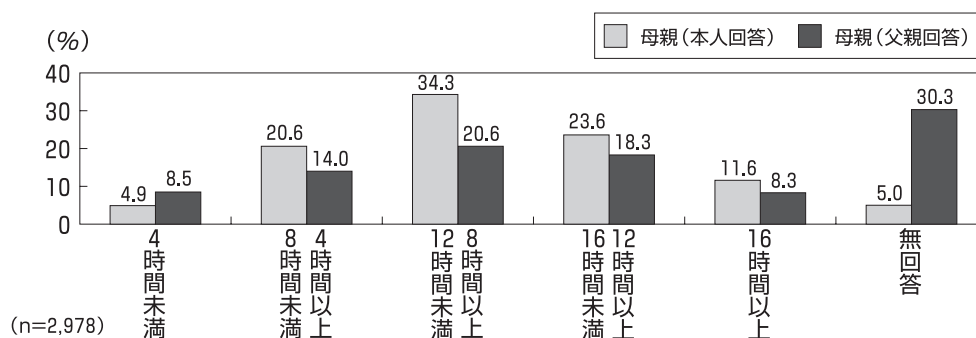
父親については、年齢が上がるとよくやっている項目は、保護者と話す（保育園末子3～6歳）、絵本の読み聞かせ（保育園3～6歳）のみである。若い父親の方がやっている項目は、おむつかえ／トイレの手伝い（幼稚園末子3～6歳）、子どもとの買い物や添い寝（いずれも保育園末子0～2歳）などとなっている。若い世代は、従来父親があまりかかわらなかった子育てにも柔軟に参加している傾向がある。

(2) 家事・育児時間

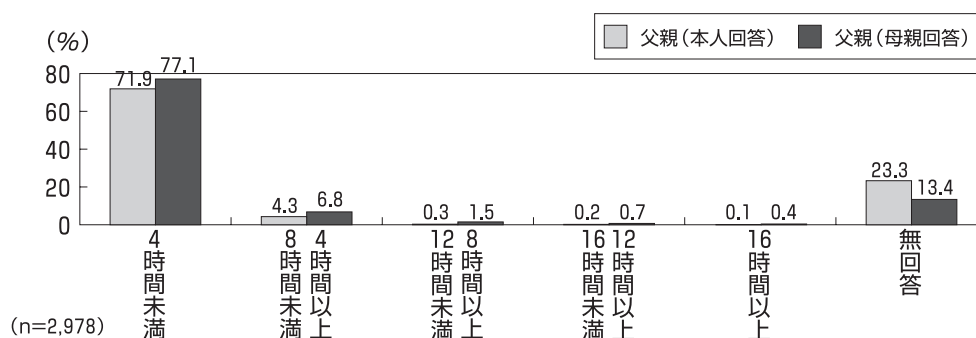
①夫婦の家事・育児分担

平日の家事・育児時間について、おおよその時間をたずねた。図表2-5、2-6をみると明らかなおおとり、母親と父親の差は非常に大きい。母親の下限にあたる4時間を越える父親は、特別な存在である。また、全体的に父親は母親の育児・家事時間を少なく見積もる傾向がある。一般にこのような質問形式で時間を問うと、日記式²などで詳細にデータを取ったときよりも男性は自分の家事・育児時間を多めに回答する傾向が指摘されている。本調査では、母親は父親の家事・育児を過大にすら評価しているのに、父親は母親の家事・育児を過小評価している。母親が配偶

図表2-5 平日の家事・育児時間（母親）



図表2-6 平日の家事・育児時間（父親）



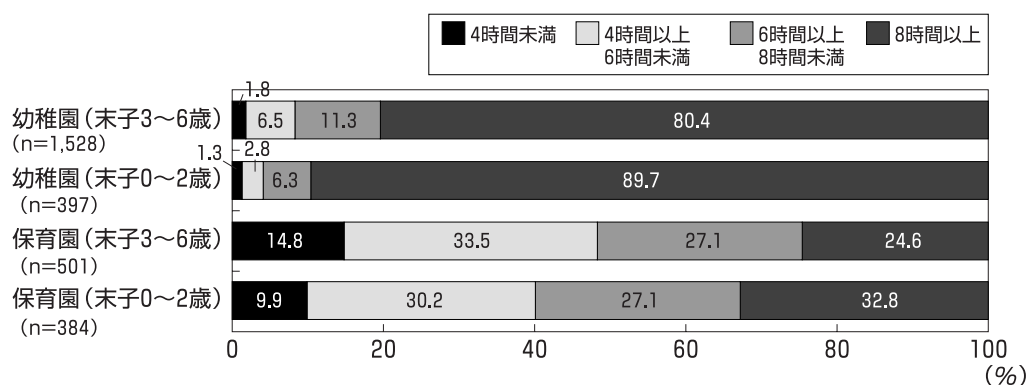
者の家事・育児時間をよく把握しているのに対して、父親は、無回答の割合も30%となっており、おそらく家事・育児がどのくらい必要なのかがよくわからず、母親の日常が時間に追われているということに、気づいていない人も相当数にのぼるであろう。

②通園先・末子年齢と家事・育児

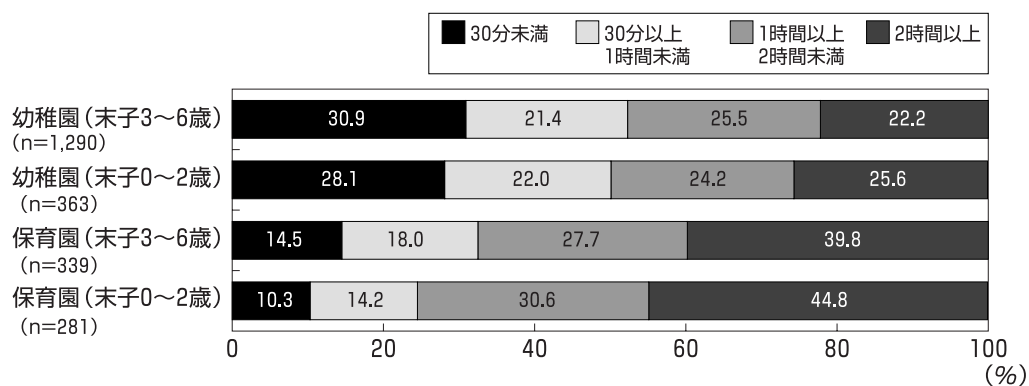
また、通園先と末子年齢を組み合わせたクロス集計によれば、幼稚園に通う母親の家事・育児時間は非常に長く、8時間以上が8割を超えている（図表2-7、2-8）。一方、保育園に預けていても6時間以上も家事・育児時間にとらわれている母親が半数を超えている。保育園児の母親の大半は、さらに仕事時間が加わることを考えると、多忙な生活を送っていると推察される。

一方、父親の家事・育児時間は通園先による変化が母親ほどははっきりしない。そもそも、水準が母親とはあまりにも違っており、保育園児を持っていても母親の最低家事水準である4時間に届く人はほとんどいない。2時間以上やっている父親は、保育園児で40%程度にとどまっていた。

図表2-7 平日の家事・育児時間（母親：通園先と末子年齢別）



図表2-8 平日の家事・育児時間（父親：通園先と末子年齢別）



2. 子育てのサポート関係

(1) 子育てを支援してくれる人がいるか

①母親からみたサポート関係

まず、母親からみれば外出時に子どもを世話してくれる（＝実働ネットワーク）割合は配偶者が87.4%で、一番頼りになる存在である（図表2-9）。二番目に頼りにされているのは親で、63.5%とかなり高い。園を通じた知人との預けあいも53.7%と半数を超えて行われている。親族の方が友人よりも気楽に預けあえる関係となっているようだ。実際、戦後の子育てでは常に重要なネットワークとされてきた兄弟姉妹は、現在でも37.6%とまだ重要なネットワークでありつづけている。兄弟姉妹とはいっても、姉妹が中心になることを考えると、きょうだい数の少ない昨今では、最初からこのネットワークに恵まれている人とそうでない人の差は大きい。

また、育児の相談にのってくれる人（＝相談ネットワーク）になると配偶者の存在はやや低下して、親や園を通じた友人・知人などが頼りにされている。相談ネットワークになると、友人・知人の割合が70%を超えることから、預けあう関係はなくても、同じ年代を持つ子どもの親同士で悩みを共有しあえている人は多い。

図表2-9 子育ての支援をしてくれる人(母親)

(n=2,978)

	配偶者 %	親 %	兄弟姉妹 %	親戚 %	保育園・幼稚園の友人・知人 %	同じ職場の人 %	それ以外の友人・知人 %
a.あなたの外出中に、子どもの世話をしてくれる	する 87.4	いる 63.5	いる 37.6	いる 15.1	いる 53.7	いる 3.2	いる 36.6
	しない 6.6	いない 33.3	いない 53.9	いない 83.3	いない 45.0	いない 95.2	いない 61.8
	配偶者なし 4.7	親なし 2.1	兄弟姉妹なし 7.1			職業についてない	
	無回答 1.4	無回答 1.0	無回答 1.5	無回答 1.6	無回答 1.3	無回答 1.6	無回答 1.6
b.育児の相談にのってくれる人	する 84.2	いる 83.1	いる 51.8	いる 26.6	いる 78.4	いる 22.9	いる 74.3
	しない 9.1	いない 14.2	いない 39.6	いない 71.0	いない 19.2	いない 22.0	いない 23.2
	配偶者なし 4.4	親なし 1.2	兄弟姉妹なし 6.2			職業についてない	
	無回答 2.3	無回答 1.5	無回答 2.4	無回答 2.4	無回答 2.3	無回答 2.6	無回答 2.5

図表2-10 子育ての支援をしてくれる人(父親)

(n=2,401)

	配偶者 %	親 %	兄弟姉妹 %	親戚 %	保育園・幼稚園の友人・知人 %	同じ職場の人 %	それ以外の友人・知人 %
a.あなたの外出中に、子どもの世話をしてくれる	する 95.5	いる 58.0	いる 30.4	いる 16.5	いる 34.2	いる 3.7	いる 18.9
	しない 0.6	いない 35.6	いない 60.6	いない 78.8	いない 60.7	いない 91.0	いない 76.0
	配偶者なし 0.3	親なし 1.9	兄弟姉妹なし 4.5			職業についてない	
	無回答 3.6	無回答 4.5	無回答 4.6	無回答 4.8	無回答 5.1	無回答 4.9	無回答 5.2
b.育児の相談にのってくれる人	する 90.0	いる 69.5	いる 39.7	いる 25.3	いる 29.8	いる 33.4	いる 35.8
	しない 4.8	いない 24.0	いない 51.4	いない 69.1	いない 64.1	いない 60.5	いない 58.4
	配偶者なし 0.3	親なし 1.4	兄弟姉妹なし 3.5			職業についてない	
	無回答 4.8	無回答 5.1	無回答 5.4	無回答 5.6	無回答 6.1	無回答 5.7	無回答 5.8

図表2-11 自分の周囲にいる人(母親)

(n=2,978)

	配偶者 %	親 %	兄弟姉妹 %	親戚 %	保育園・幼稚園の友人・知人 %	同じ職場の人 %	それ以外の友人・知人 %
c.子育てのことですべても悩んでいる人	する 21.7		いる 13.6	いる 6.3	いる 26.7	いる 6.5	いる 24.7
	しない 54.7		いない 65.7	いない 77.1	いない 56.7	いない 34.5	いない 58.4
	配偶者なし 4.2		兄弟姉妹なし 4.4			職業についてない	
	無回答 19.4		無回答 16.4	無回答 16.6	無回答 16.6	無回答 16.6	無回答 16.9
d.(子どもが1人いて自分は2人目の子どもを絶対つくりたくないと言っている人	する 12.8		いる 8.8	いる 5.5	いる 22.1	いる 6.0	いる 25.4
	しない 59.0		いない 68.2	いない 75.7	いない 59.1	いない 35.4	いない 56.0
	配偶者なし 3.9		兄弟姉妹なし 4.3			職業についてない	
	無回答 24.3		無回答 18.7	無回答 18.8	無回答 18.8	無回答 18.6	無回答 18.6

図表2-12 自分の周囲にいる人(父親)

(n=2,401)

	配偶者 %	親 %	兄弟姉妹 %	親戚 %	保育園・幼稚園の友人・知人 %	同じ職場の人 %	それ以外の友人・知人 %
c.子育てのことですべても悩んでいる人	する 31.3		いる 10.1	いる 5.6	いる 10.2	いる 11.0	いる 9.9
	しない 49.7		いない 70.6	いない 77.5	いない 72.6	いない 71.5	いない 72.8
	配偶者なし 0.5		兄弟姉妹なし 2.7			職業についてない	
	無回答 18.5		無回答 16.7	無回答 16.9	無回答 17.2	無回答 17.2	無回答 17.2
d.(子どもが1人いて自分は2人目の子どもを絶対つくりたくないと言っている人	する 12.4		いる 6.0	いる 3.7	いる 7.1	いる 11.4	いる 10.9
	しない 64.3		いない 71.6	いない 75.9	いない 72.0	いない 68.1	いない 68.8
	配偶者なし 0.4		兄弟姉妹なし 2.3			職業についてない	
	無回答 22.9		無回答 20.1	無回答 20.4	無回答 20.9	無回答 20.2	無回答 20.2

②父親からみたサポート関係

つぎに、父親からみると、実働ネットワークでは配偶者の存在が非常に大きく、95.5%である。無回答と配偶者なしを除くと、99%になる。2番目に頼りにされているのは親であるが、母親が親を頼っている割合よりは低い（図表2-10）。親族ネットワークに頼る傾向は母親よりもさらに強いといえる。この状態では、ひとたび母親が病気になった場合など、リスクを親族が引き受けられなかった場合には、子育てが直ちに立ち行かなくなってしまう。現実には、園児を持つ母親が緊急入院のためにお迎えにいけなくなったりすると、まず自分のことより子どものことを心配して、手配をしているなどという例をみかけることがある。

また、父親は母親にくらべると自分の子どものことは親に相談しない傾向がある。相談についても配偶者にかたよったネットワーク状況がうかがえる。また、地域で友人・知人などに相談する割合も低いとはいえ、30%はそういう相手がいると答えているので、生活スタイルによる個人差が大きいともいえる。母親よりも相談相手が多くなっている職場でさえ、33.4%にすぎないことを考えると、家族がいる男性は、やはり職場で子どものことは話題にしないのだろう。

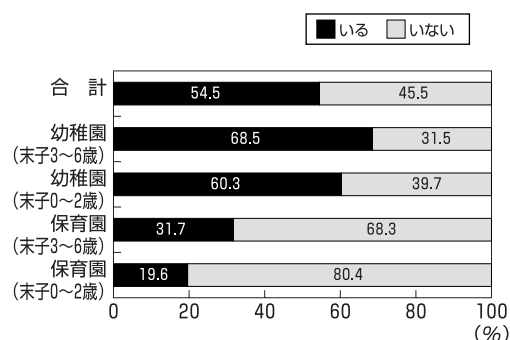
③通園先・末子年齢とネットワーク数

子育て支援のネットワーク数^{*3}は、通園先と末子年齢からみて差があるのだろうか。図表2-15、2-16に母親のネットワーク数に関するクロス集計結果を示した。図表2-15をみてわかるとおり、幼稚園児の母親の方が、実働ネットワークの数で見ると多くなっている。実働ネットワーク数を従属変数として、一元配置分散分析を行った結果によると、1%以下の水準で有意に差がみられたのは、外出中の世話という実働ネットワークのみで、相談ネットワークから差は検出できなかった。さらに、分散分析後の多重比較を行った結果によれば、幼稚園カテゴリーの母親に比べて、保育園児は末子年齢にかかわらず、ネットワーク数が少ない傾向がある。保育園という預け先がある分、そのほかのサポートネットワークを確保していないと考えられる。

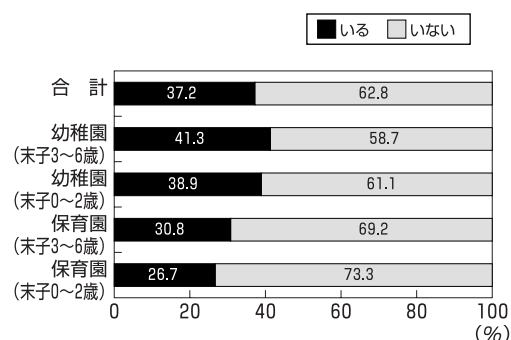
父親については、実働ネットワークと相談ネットワーク数のいずれも通園先と末子年齢による差は検出されなかった（図表省略）。

では、幼稚園児を持つ親が持っているネットワークとは、実際誰なのか。園やそれ以外の友人・知人だといってよい。いずれも、カイ2乗検定をすると1%以下の水準で有意である。幼稚園の母親は、普段保育園のような長時間の預け先がない分、外出時に預けあえる関係を順調に作っていくが、保育園の母親は子どもの年齢があがっても、預けられる近隣の友人はあまり増えていかない。必要度が低いという面はあるとはいえ、子育てネットワークの必要性は子どもの卒園後も続く。育児休業中などの孤立傾向などの指摘があるのとおり、保育園児の母親の友人・知人ネットワークが少ないのは気がかりである。

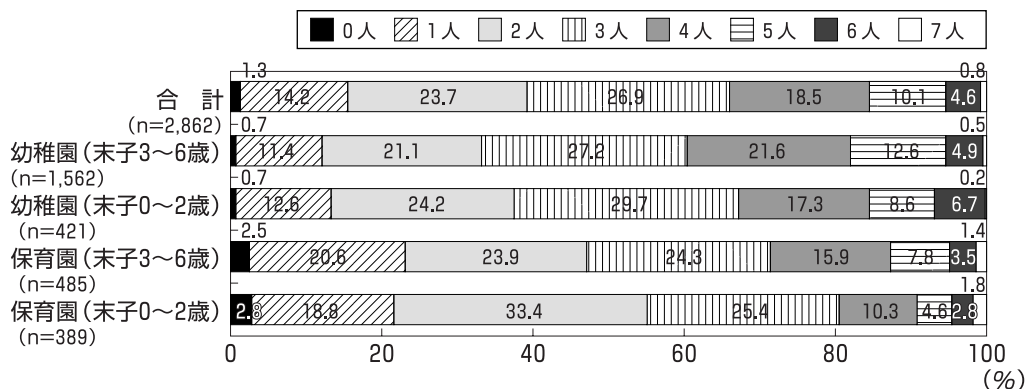
図表2-13 保育園・幼稚園の友人・知人



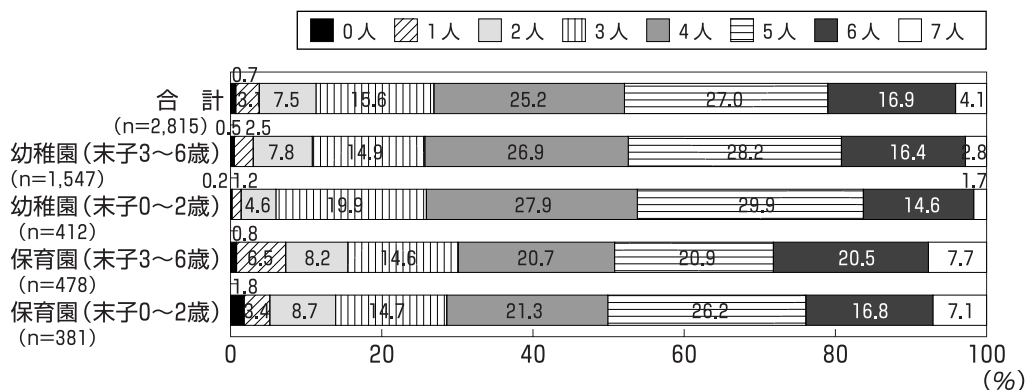
図表2-14 それ以外の友人・知人



図表2-15 外出中に子どもの世話をしてくれるネットワーク数(母親)



図表2-16 育児の相談にのってくれるネットワーク数(母親)



(2) 周囲の子育てにかかわる意識

まず、母親からみると子育てに悩んでいる人は、園の知り合いやその他の友人知人で25%前後とそれほど高い割合ではないようだ(図表2-11参照)。2人目の子どもを絶対につくらないと言っている人の割合もほぼ同率であり、悩んでいる人との関係がありそうだ。6章でも分析されているように、悩みの項目によって異なるものの、本人が悩んでいる割合も20～30%程度である。乳幼児の子育てに悩む母親の割合はおおむね、主観的にも客観的にもこのあたりの数字だといえ

るのではない。

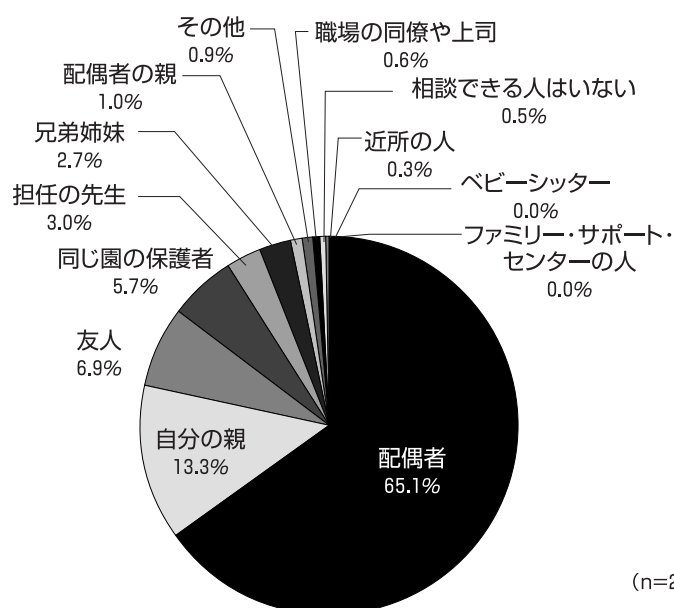
つぎに、父親から見ると配偶者の3割が子育てに悩んでいるようにみえている（図表2-12）。だが、それ以外の場所で子育ての悩みなどについて聞く機会はありませんようで、10%程度しかいないと答えている。職場で2人目はいらないと言っている人と知り合う割合が母親より高くなっているのは、職場に出ている割合が大きいからであろう。けれども、職場以外ではそういう話を聞く機会は母親に比べてあきらかに少ない。「2人目を産まない」という話題を共有することがないため、少子高齢化が進む理由について身近な事例から理解する機会にとぼしいと推察できる。

(3) 子育てのことを最も相談できる人は誰か

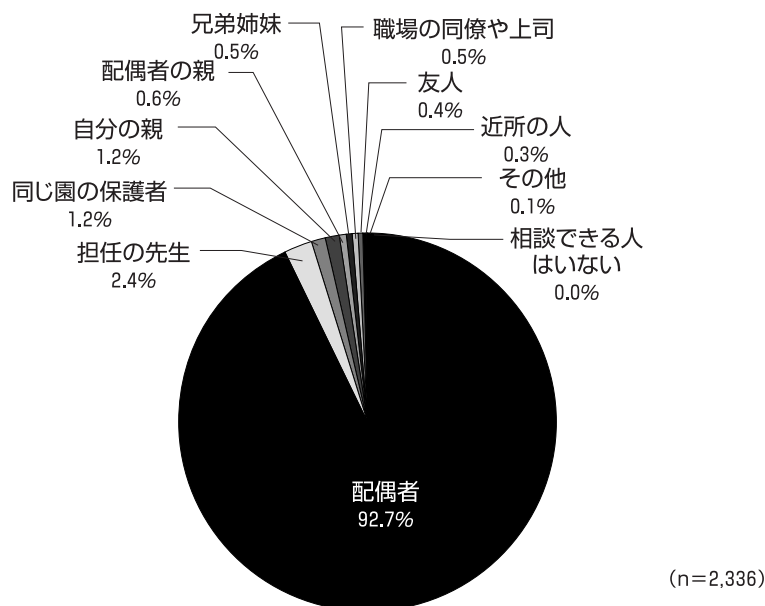
まず、母親からみると配偶者は相談相手として最も期待されていることがわかる。最も相談できる人という質問とはいえ、園の担任の先生が5番目となっているのは少し残念である。親や友人知人など専門家でない相談相手の方が、園の担任の先生よりも頼りになっているようだ。（図表2-17、図表2-18）。父親からみると、相談先は配偶者にかたよっている。2番目に多かったのが担任の先生で2.4%。自分の親は、4番目で1.2%しかない。父親は、どうも自分の親には子どものことを話さないようだ。

図表2-19に通園先と末子年齢別にみた相談できる人の割合を示す。配偶者と答えた人は、保育園の方が幼稚園より低く、その分自分の親や友人、担任の先生などと答える割合が多くなっている。保育園の場合には、ひとり親家庭の割合も高いことも関係していると考えられるが、共働きの子育てが祖父母に支えられているという現状が反映したのではない。

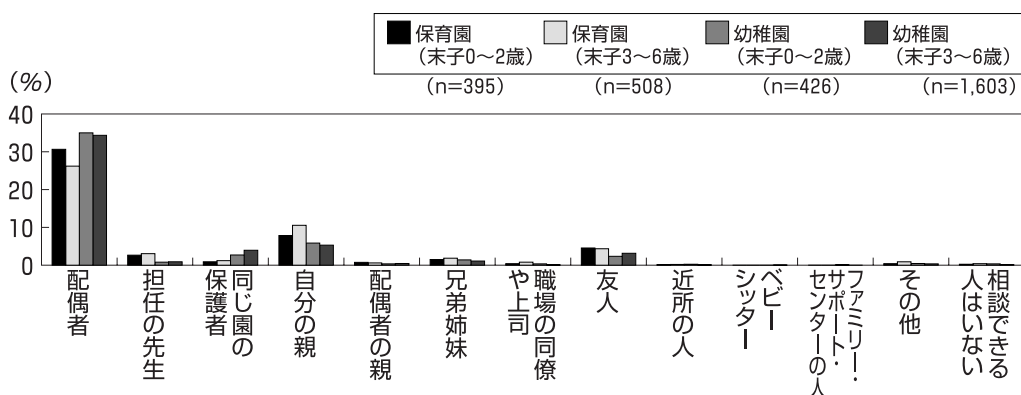
図表2-17 子どものことで気になることがあるとき、もっとも相談できる人（母親）



図表2-18 子どものことで気になることがあるとき、もっとも相談できる人（父親）



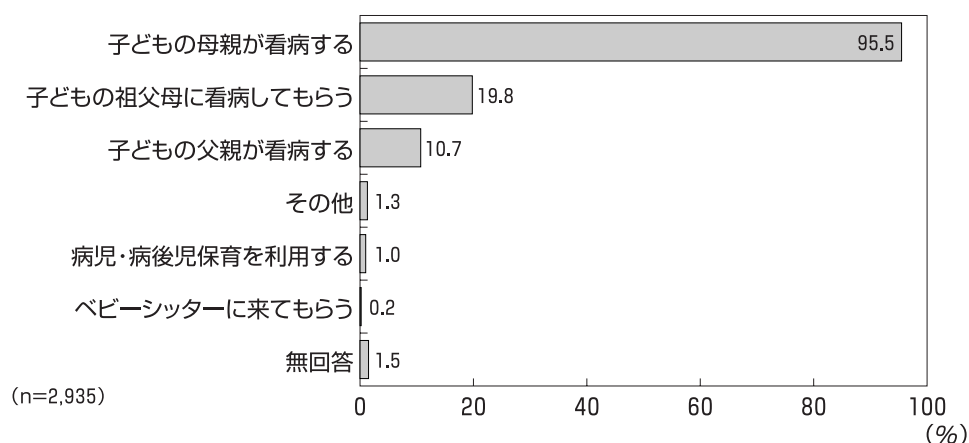
図表2-19 子どものことで気になることがあるとき、もっとも相談できる人（母親:通園先と末子年齢別）



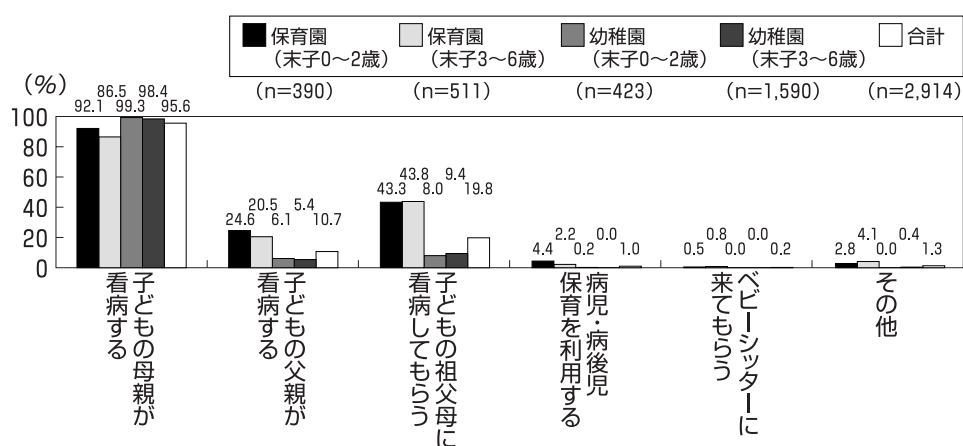
(4) 子どもが病気の時には看病するのは誰か

子どもが病気になった時には、やはり圧倒的に母親が看病している（図表2-20）。この質問は頻度を問わない複数回答なので、日中に看病することが一度でもあれば母親とともに○をつけられるのだが、父親が看病すると答えた人は10人に一人に満たない。病気時の看病がいかに母親に集中しているかがわかる。また、祖父母は19.8%で、病気時には父親よりも頼られている。父親が病気の子どものために職場を休む権利が、制度としては母親なみに整ってきたにもかかわらず、実際に休みを取ることは難しいという現状が反映している。病気時の看病は子育てにかなりの自信がなくては難しい。仕事を持たない母親であろうと、日中子どもの看病を頼まなくてはな

図表2-20 子どもが病気の時に看病する人（複数回答、母親回答）



図表2-21 子どもが病気の時に看病する人（複数回答、母親回答）



らない状態もあるだろう。どちらかといえば、時間の問題ではなく父親に自信がなくてできないのではないだろうか。母親にとってみれば、現状は「もしもの時には父親に頼める」という安心感さえもない子育てとなっている。

また、通園先と末子年齢を組み合わせたクロス集計によれば、保育園では母親の割合が下がり、祖父母や父親などの割合が増える。しかし、やはり父親のサポートは限定的で2割程度にとどまり、祖父母が4割となっている。共働き世帯が祖父母のサポートに頼っている現状がよく現れている。また、病児病後保育の利用は、最も高い割合の保育園（0~2歳）でも4.4%にとどまっている。

3. まとめ

日常の様子から見る限り、子育ての大半を母親が担うという実態は現代においても持続している。保育園に子どもを預けている家族であっても、父親との分業はあまりすすんでいない。子どもといっしょに夕食をとる父親さえ少ない現状では、子育てへの参加はままならないであろう。それでも、保育園児の父親は、幼稚園児の父親に比べれば子どもにかかわっているといえる。母親にくわえて父親が子育てにかかわる保育園児は、家庭では比較的手をかけられている。

ただし、保育園児の父親が分担している子育てがわずかなため、母親が子どもとのかかわりを減らしているのは、送迎など一部の項目にとどまる。家庭での子育てが分担されているわけではないので、結果的に保育園に子どもを預けて働く母親たちは、日中の仕事に加えて帰宅後にも家事・育児をになう二重負担を背負い、高い時間圧力にさらされていると考えられる。

家事・育児時間というデータをみると、さらに母親への分担傾向がはっきりする。乳幼児を持つ母親は、保育園に預けていたとしても最低で、4時間程度の家事をこなす。一方、父親にとって4時間は上限で、2時間未満が大半である。幼稚園か保育園かによって、母親の家事時間には明瞭な差異があるのに、父親の差異は不明瞭である。現状では、長時間働いている場合、母親の負担感は大きいであろう。また、父親は母親がやっている家事時間を低く見積もる傾向がある。お互いにやるべきことを認識した上での分業に至る以前に、家事・育児としてどんな行為が必要となっているのか互いに理解を深める余地が残っているようだ。さらに、子どもへのかかわりは学歴によって差があった。したがって、高学歴で仕事を持つ母親の日常は大変忙しいのが実態である。

母親の8割程度は、外出時に預けられるネットワークを複数持っている。父親は、預け先としても相談相手としても比較的頼りにされているといえる。全般に、保育園児のネットワーク数は、幼稚園児よりも少ない傾向がみられた。日常生活時間にゆとりがないため、同じ園の親同士が会話する機会がつかれず、預けあえる関係を作るのが難しいのかもしれない。平日に多忙な仕事を持つ母親たちは、休日に子どもを預けあえる関係を築いていないのである。保育施設で友達と過ごすことと、互いの家庭の行き来の中で身につけていくルールには違いがある。子どもは別の家庭に預けられることで、自分の家ではやっていいことでも、他の家ではやっていけないことがあると気づいたりしながら、社会の常識を学んでいく。保育園児が、他の家族とともに過ごすという、貴重な経験を得る機会が少ないのは問題である。一方、相談ネットワークには通園先などによる差はみられなかった。相談は近隣でなくてもできるからであろう。けれども、子育ての実働サポートは距離の近さが重要だ。「遠くの親戚より近くの他人」といわれるように、同じ園の友人知人には預けられるような関係にはもう少し深まる余地があると思う。

子どもが病気になった時、幼稚園児を持つ母親のほぼ全員が自分で看病すると答えていることが象徴的するように、子どもを健やかに育てるという意味での責任は事実上母親に一極集中している。この責任は、子育てを分担している実態とは、別の次元でさらに重圧感をもたらすのではないだろうか。人生には、仕事の他にも親や自分の病気などさまざまなリスクがつきものである。けれども、母親にとって、配偶者を含めてそれらのリスクを吸収できるインフォーマルなネットワークは、十分得られていない。頼りになる親族が近くにいない母親は、まさに日常生活を綱渡りで過ごす。保育園や幼稚園が、近隣のネットワークを育てるような場となるために、まだでき

ることがあるのではないだろうか。

注1 週当たりの頻度を絶対値で解釈するため、「週4日以上」に5、「週2,3日」に2.5、「週1日」に1、「月1, 2回」に0.35、「ほとんどなし」に0をそれぞれ割り当てて算出した。

注2 生活時間調査で、24時間スケールなどを用いて記録を日記式でつける方法。質問式よりは合計時間が24時間という制約もあるので、正確な行動時間を把握できると言われている。

注3 子育ての支援をしてくれる人がいる場合に、そのカテゴリーに1を与え、合算した。ネットワーク先の種類の多さであって、それぞれの支援の強さをはかる尺度ではないことに注意。